

月刊

いじろのとも

第六卷

十二月号

人間は能力の束

人間は

能力の束だと

多くの心理学者が

言う

人の心を感じる能力

人を愛する能力

社会奉仕をする能力

こんなものまで

能力にする

これは

個人主義

合理主義の

弊害だ

これら

人に向ける

ところは

生まれたときに

既に

完成しているもの

それが

文化で

汚されていくもの

人生を考え直して

みたい人は(二四)

『老子』解説(二二三)

今回を『老子』解説の最終回にしたいと思えます。

最終回ですので、特定の章ではなく全般的なことを書きたいと思い、あらためて、これまで取り上げて解説してきました二十二回分を読み直してみました。

どの回も深い真理を述べていて、既に知っていることなのに、感動をおぼえました。

それらは、どれも常識を超えていて、普通では分からないことばかりだと思えました。その点は、大体同じ時代を生き、常識的な処世術を説いた「孔子」と好対照をなしています。

今回は、なぜそうなったのか、その差はどこにあるのか、などについて、先ず、検討しておきたいと思えます。それを一口で言いますと、それは、孔子は能才でしたが「解脱」していなかったのに対して、老子は解脱に達していたということです。

ここで大切なのは、常識的に孔子が説くことが、解脱していない常識的な人に行うことができるかどうか、というこ

とです。

実は、当の本人の孔子すら実行できていなかったと思われませんが、それは、人間が「はからって」できることではないのです。例えば、孔子の教えの中心は「仁」ですが、それは自分を制して、他者を立てること、愛することです。しかし、それが確実に、間違いなく、自然に、実行できるのは、解脱に至ったときだけなのです。多くの人は、自分のことではなくて、客観的に他者が「どうなすべきか」の判断を求められるときには、正しい、義になつた、善い判断をすることができるかもしれませんが、しかし、それは、現実を離れた架空のことであって、自分が全く利害関係をもたない、自分がした判断の価値も現実のこととして問われない、完全に自分が引き込まれない中立的な状況にあるときだけなのです。もし、現実の生活の中で、具体的に自我が巻き込まれた現場的状況では、まったく話は変わってきます。

一つの例として、ドイツの哲学者たちの例をあげることが出来ます。カントは「定言命法」として「汝の意志の格率がつねに同時に普遍的立法の原理として妥当しうるように行なせよ」、「汝の人格ならびにすべての他者の人格における人間性を、つねに同時に目的として用い、決してたんに手段として用いないように、行なせよ」と

現代人のように「これだけしたから、これだけの効果があるはずだ」などと計らわず、「ひたすら」行うことが大切なのです。

こうした修行をするとき、勉強しなくても、勉強できなくても、知らないことはなくなってくるのです。為さずして為さざることがなくなってくるのです。つまり、孔子のいちいちの徳目を知らなくても、自然に行うことができるようになるのです。意識して守ろうとしても守れなかったことが、意識しないで自然に守ることができるようになれるのです。この境地を老子は無為自然と言ったのです。

皆さんもどうかそうなることを目指して、ひたすら修行して頂きたいと思います。テレビや新聞を読む時間があれば、それを節約して、一日十分でも二十分でも結構です。毎日まいにち、ひたすら一人静かに瞑想するなり、読経するなりして、修行して頂きたいのです。

今回最後にもう一つ述べておきたいことがあります。それは、老子の教えから発展した道教（仙道）についてです。道教では、不老長寿を得ることが目的の一つとされています。道教では、どうもそれは間違っていないかと思うのですね。一説によりますと老子は数百歳まで生きておられ、そのことが不老長寿の教えにつながっていると

思いますが、老子はそんなことは言っていないと思います。

老子は、仏教で言えば、解脱に至っていました。実は、その境地そのものが不老長寿なのです。実際に数百歳まで生きるという身体的な生命を言っているのではないのです。なかなか分かって頂けないと思いますが、解脱に至れば、一日生きても、もう既に永遠に生きてきた思いがしますし、今後もたとえ肉体は死んでも、たましいはどこかで永遠に生き続けると確信できるのです。

それは、一日生きることが、永遠に生きることと同じことだと言えるのです。

ですから、不老長寿を得る道は、物理的に生理的体としての寿命を延ばすことではなくて、一日生きることが、永遠に生きることだと感じられる境地に至ることだと言えるのです。もし、そうなれなくても、そうした境地に至った人と共に暮らし、その人の教えを守って、生きていけば、解脱したのと同じ境地を味わうことができます。

なお、実際に仙道で行われています修行法は、殆どヨガの中に含まれているように思います。ですから、たとえ文字通りの不老長寿が得られなくても、精神的・身体的健康をうることはできると思います。

自作詩短歌等選

コミュニケーション響育

コミュニケーション教育
は

コミュニケーション響育
それは

こちらの伝え合い
こちらの感じ合い

こちらはお互いに
伝播するものだから

空虚な時間を送る

人間にとって

時間とは

成ること

人間に成ること

だから

人間に成らない人は

成ろうとしない人は

時間を無駄にして

空虚な時間を

送っている

そんな人の人生は

犬猫人生

犬猫以下人生

なんと

そんな人の

多いことよ

つねに若い

他己性を帯びた

からだは

年老いていく

が

自己性を帯びた

ところは

つねに若いまま

社会に定位する

人は

社会に支えられ

社会に定位する

時間が刹那的

自己を
肥大させるほど
時間は
刹那的になり
終末論的になる
すると
死後の世界が
迫ってくる

子育てと人柄

子育てに
人柄すべて
現れる
善きにつけても
悪しきにつけても

地球救済の論理

民主主義は
個人の論理
強者の論理
建前の論理
でも
地球救済は
集合の論理
弱者の論理
本音の論理

デモシカ教授

むかし
デモシカ先生という
ことばがあった
いまは
大学教授にも
当てはまるように
思える

人を失う

宗教を
信じられない
現代人
こころ失い
人を失う

ペットロボット

おとなの
遊び相手になる
ペットのような
可愛いロボットが
売り出された
買う人いわく
子どもより
言うことを
よく聞きますよ
と

自作随筆選

吠え付き症候群

この頃、飼い主に吠えたり、噛みついたりする、犬の異常な行動が増えているそうです。例えば、犬が餌を食べているとき、飼い主が餌に近づいたり、手をだしたりしますと、「ワッウー」と言つて、吠えます。もし、その餌を取り上げようものなら、手に噛みついてしまうのです。こうした現象は、最近、かなり一般に共通して見られるようで、「吠え付き症候群(?)」という、それを総称することはまだあるようです。

そうなるのは、犬を可愛がり過ぎて、犬にわがままを許してしまう結果、犬が自分をその家の主人、つまり群れのボスであると思うようになるからだと言います。

しかし、この話は、なにも犬に限ったことではないように思えるのです。最近の人間の子育てでも同じことが該当するのではないのでしょうか。

つまり、親の権威がなくなり、平気で親に「吠えたり、噛みついたりする」子が、増えているように思えるのです。そうした状況を見ていると、親なのか、友達なの

か、あるいは、もつと言いますと、下僕なのか侍女なのか分からないような、ぞんさいな態度で子が親に接しています。

こうした状況は、どうも夫婦あたりの子ども数が少なくなつた結果、あたかも犬のように、ペットとしてわがまま一杯に、甘やかして育てることに起因するように思ふのです。

そのことをもう少し深く見ますと、一方では甘やかしていると言えるのですが、他方から見ますと、躰けをしていないということでもあるのです。子どもは親が養育し、人間として一人前に育ててやるという気概がないのだと思ふのです。ペットのように可愛がつていれば、自然に人間になると思つていられるのです。ですから、積極的に関わるうとはしません。自分の気分で接するだけだと思ふのです。そうなりますと、子どもは親を頼りにしたり、信じたりすることができなくなつて行くのではないのでしょうか。

最近の子どもたちのいじめや不登校の蔓延化を見ていると、どうも、親あるいは大人一般が、その解決に殆ど役割を果たせなくなつていっているように思えるのです。それは、親や大人が信じるに足らない、あるいは頼りにするに足らない証拠であるように思えて仕方ありません。

釈尊のごとば（四一）

法句経解説

（一五〇）骨で城がつくられ、それに肉と血とが塗ってあり、老いと死と高ぶりのごまかしとがおさめられている。

ここでは、人間の肉体をお城にたとえています。その城には、自分が閉じこもっていますが、その城もやがて老い、遂に死んで滅んでしまいます。でも、そのことを多くの人は、他人ごとのように思って、切実には感じません。それは、実は、自己を肥大させ、高慢になつていくことと裏腹の関係にあります。高慢になりますと、そのことが、死や老いや高慢を覆い隠してしまうのです。私は、先日、この偈とは無関係に、つぎのような歌をつくりました。

図らずも 罪を犯せし 罪人は

刑務所のなか 囚人となる

図りても 悪事を為せし 凡人は

自己の殻への 執人となる

この歌にある自己の殻が、この偈では城ということになります。

人間は、誰でもが仏教で言う「煩惱」をもっています。その煩惱は、自分が楽をして、自分の生命を無限に拡張させようとしています。具体的には、食欲（物欲・金銭欲）、性欲（子孫繁栄欲）、優越欲（権力、名誉欲）などの欲望です。

こうした欲望が満足させられずと、人間は誰でもが老いや死を忘れ、驕慢になり、執着を強めて、救いの道（絶対的な平安・安心、幸福・福祉）からますます遠ざかって行くのです。でも、そのことに気付ける人はいません。

この偈は、そのことを戒めています。

（一五一）いとも麗しき国王の車も朽ちてしまう。
身体もまた老いに近づく。しかし善い立派な人々の徳は老いることがない。善い立派な人々は互いにこ
とわりを説き聞かせる。

かつて、中国のある王さまは、国土に長大な塙を巡らせ、広大なお城を構築し、自分の死後のための王宮までも建てさせて、多くの殉死者と多くの人形に守られて、いやいやながらも死んで行きました。しかし、その城も今では朽ち果ててしまい、その王さまの悪徳を誇るもの

はいても、遺徳をしのぶものはいません。

しかし、同じ中国の老子は、どこで、いつ生まれ、どこで、いつ死んだかも、必ずしも定かではありません。残したのも、たった五千字の文章だけです。でも、その徳は老いることがないのです。事実、今も、私の中に生き続けています。老子を、私は今に感じているのです。私の中で彼は過去にはなっていないのです。

そして、私は、彼の教え・ことわりを、私のことばに置き換えて、本誌で二十三回にわたり、説いてきたのです。

(一五二) 学ぶことの少ない人は、牛のように老いる。かれの肉は増えるが、かれの智慧は増えない。

この偈で注意しなければならないことは、「学ぶことの少ない人」というときの「学ぶ」とは、どんな意味なのかということなのです。

一般に学ぶとは、学習すること、あるいは勉強することと思われています。でも、ここではそうではないのです。

一般に学習すると言いますのは、いろいろ教えてもらったり、本を読んだりして、知識や技能を増やしていく

ことだと思つたのです。でも、ここで学ぶとは、「自分自身を知る」ということです。では、自分自身を知るとはどんなことなのでしょう。

それは、自分が生きていることが、どんなことなのかを知ることです。それを知って、絶対の安心に至ることです。それを智慧といいます。

智慧は、ですから、知識ではありません。いくら知識を得ても、それが智慧になることはありません。知識を得るために、殆ど字が読めなくても、おぼえられなくても、智慧を得ることはできるのです。今のことで言えば、新聞を読まなくても、テレビを見なくても、智慧をえることが出来ます。もつと言いますと、学校でよい成績を得なくても、殆ど勉強が出来なくても、智慧をえることはできるのです。

では、どうすれば出来るのでしょうか。それには先ず、仏さま(神さま)を信じることです。自分を超えた絶対者を腹の底から、心の底から信じることです。自分がその者によつて生かされていることを信じることです。

そして、その超越の教えを説く人を信じて、その人から従うことです。その人のいう通りにひたすら努めることです。

しかし、現代人は、一人ひとりが「偉く」なって、殆

どこのことができなくなってしまっています。たまにできたとしても、それは自分に執らわれた教えなのです。自分に執らわれた教えしか現代人には通用しなくなってしまっているようです。

自己を知ることを目指さない人の人生を、私は犬猫人生、あるいは犬猫人生以下人生と言っています。この偈では、牛にたとえられています。

老子でも、釈尊でも、ソクラテスでも、キリストでも、結構です。信じて、おっしゃる通りに実行するように努めてはいかがでしょうか。

(一五三) わたしは幾多の生涯にわたって生死の流れを無益に経めぐって来た、家屋の作者(つくりて)をさがしもとめて。あの生涯、この生涯とくりかえすのは苦しいことである。

(一五四) 家屋の作者よ！ 汝の正体は見られてしまった。汝はもはや家屋を作ることはないであろう。汝の梁はすべて折れ、家の屋根は崩れてしまった。心は形成作用を離れて、妄執を滅ぼし尽くした。

この(一五三)では、(一五〇)と違って、自分のことを城ではなく、家にたとえています。この自分という

家を誰が作ったのか、その創り主を求めて、何代にも渡って生死を重ね(輪廻)て来たが、それは苦しいことだ、といっています。

人生は苦しいことばかりだとは、多くの人の迷懐です。あのすばらしい芸術を生み出したゲーテも、わが人生に一週間として安穏な日はなかったと言っています。

こうした人生の苦しみを、インドでは、生まれては死に、死んでは生まれて輪廻転生した結果と考えます。ですから、この苦しみを逃れる道は輪廻転生を断ち切ることでだと考えるのです。

それが次の(一五四)です。この偈では転生を克服したことを詠んでいます。家のたとえで言えば、それは家が崩壊したことに当たりますが、心の状態としては「形成作用を離れて、妄執を滅ぼし尽くした」ことになっています。

では、形成作用とか、妄執とは何でしょうか。形成作用という語は仏教語にはありませんが、仏教で滅するところが最終的な目標である妄執、つまり虚妄への執着を生み出すもともと考えられます。

では、虚妄への執着はどのようにして形成されるのでしょうか。そのことを少し見ておきたいと思います。

老子も釈尊もキリストも一様に、人間の人格完成のあ

りようを赤ん坊に求めています。なぜかと言いますと、赤ん坊は何に対しても執着をもっていないからです。ただ、あるがままにあるだけだからです。お腹がすいたり、不快であったりしますと泣きますが、それが満たされますと、それ以上は望みません。計らうことは何もありません。

ところが、歳を重ね成長して、いろいろなことができようになるやると、ああしよう、こうしよう、と計らいの心が生まれてきます。そうして、できることが多くなるほど、執らわれが大きくなって行くのです。同じ年齢でも、できることの多いほど、執らわれも大きいと言えます。

最近では世界的傾向として若年者（少年）が殺人を犯すことが多くなりましたが、それでも大人に較べれば極めて少ないと思います。人間は教育を受け、段々と人格が完成してくるものと、一般には考えられています。殺す、盗む、淫らなことをする、嘘をつく、などは大人になるほど多く犯すようになっていきます。これは何としたことでしょうか。

それが、子どもよりも大人になるほど執着を多くもつようになることの反映と言えるのです。なぜそうなるのでしょうか。

以下は、私の一つの説明です。

私たちは生まれたとき、自分を主張し、生き延びようとする心（泣く）と、人に関心や愛を向ける心（ほほえむ）とを矛盾なく、未分化ですが、統合してもっています。この二つの心は無意識の中に存在しますが、前者を、私は、自己の中の「生命蔵識」、後者を他己の中の「如来蔵識」と呼んでいます。

ところが、成長しているいろいろなことができるようになりますと、統合が崩れ、煩惱蔵識とも言えるこの生命蔵識ばかりが働きますのです。そうしますと、この生命蔵識に対して、如来蔵識は否定的に働きます。生命蔵識が、自分勝手に働けば働くほど、否定的になるのです。

現代人はそうなっていますが、そうした世界では仏など信じられないのです。しかし、信じようが信じまいが、仏は私たちの中に宿っていて、私たちが死へと時を刻んでいるのです。それが時刻です。いくら死にたくないとあがいても、時刻に至れば死んでいかなければなりません。

しかし、有り難いことに、このメカニズムに気付いて、自分への執着を捨て、生命蔵識を制御・滅すれば、人間存在を肯定する如来の永遠の働きが輝きだして、愛と慈悲のところがその人に滲み出してくるのです。

後記

一、今年も、もう十二月になってしまいました。『ころのとも』も六年間続けることができました。皆さまが読んでくださるお陰です。今後も精進をして、続けていきたいと思えます。ご支援下さい。

二、また、伝法灌頂を受けて（平成元年十二月）以来、毎日一編以上の詩、短歌、俳句、川柳、随筆、着想のメモ、などを書くようにしていますが、今日まで続いています。でも、忙しかったりして、そのことに注意を奪われたりしますと、すぐたまってしまいます。

三、最近、自閉症児や精神分裂病者、あるいはうつ病者の時間障害について、明らかにしたいと思いい、時間の哲学的考察についての本を読んでいます。ちょっと難しい話になって恐縮ですが、私は、時間の体験は、「自己」と「他己」の弁証法的運動だと、もともと思っていたのです。勉強してみても、その基本的な考え方に間違いがないことが確認できました。それと同時に、私の時間論の具体的な構想も発展させることができました。

四、時間は自己と他己の弁証法的運動ですので、自己と他己はお互いに矛盾的關係にあります。自己が「有」なら他己は「無」ということになり、逆に、自己が「無」なら他己は「有」ということになります。

五、「釈尊のことば」の最後のあたりでも書きましたが、自分がどこまでも「自己」を「有」として主張しますと、「他己」の無意識に秘めた「如来」さまはどんどん枯れて行き、「無」としてのみ働きます。否定的にのみ働くということになります。ということは、死が常にそこに迫ってくるということになります。「ハルマゲドン」や「霊界」が気になるといっわけです。

六、具体的に言いますと、金や権力を得るほど、時間はなくなってくるのです。浦島太郎は龍宮城に行き、自己に閉じて時間を失いました。それを詰めて、土産にされた玉手箱を開けた途端、元の時間を取り戻したのです。

月刊 ころのとも	平成七年十二月八日
第六卷 十二月号	〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島
(通巻 七十二号)	鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>（ひびきのさと）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	